

いまは亡き
田中隆昭先生と
なつかしき祖父へ

目次

序章	1
一 本文の流動性	1
二 物語の諸本	1
三 物語内容の差異	2
四 平安時代における『源氏物語』の書写	3
五 定家本・河内本の登場	5
六 定家本と河内本の相剋	6
七 本の権威化、中心と周辺	7
八 本書の構成	8
第一部 『源氏物語』本文系統の再構築	13
第一章 揺らぐ「青表紙本／青表紙本系」	13
一 はじめに	13
二 「青表紙本系」の問題	14
三 「青表紙本」という名称	17

四 「青表紙本」は「別本」か……………	18
五 定家の校訂……………	20
六 複数の定家作成『源氏物語』……………	24
七 おわりに……………	26

第二章 中世における源氏物語の本文——了俊筆伊予切「夕顔」巻の本文系統——

一 はじめに……………	32
二 了俊筆『源氏物語』……………	33
三 手法の紹介とデータ作成手順……………	35
四 分析結果……………	39
五 おわりに……………	41

第三章 『源氏物語』諸本分類試案——「空蟬」巻から見える問題——

一 はじめに……………	45
二 手法と凡例……………	45
三 全体の分析結果……………	52
四 第一類（≠旧青表紙本系）の分析結果……………	55
五 おわりに……………	59

第二部 『源氏物語』の本文世界……………63

序節……………	63
---------	----

第一章 賢木巻の本文世界素描（二）——源氏をめぐる女君たち——

一 はじめに……………	67
二 六条御息所母娘……………	68
三 朝顔齋院……………	74
四 朧月夜……………	78
五 おわりに……………	83

第二章 賢木巻の本文世界素描（二）——苦悩する／したたかな藤壺——

一 はじめに……………	88
二 桐壺院崩御……………	89
三 源氏と藤壺の密会……………	97
四 藤壺・源氏の出家願望……………	106
五 藤壺出家……………	110
六 藤壺出家後の源氏方……………	115
七 おわりに……………	118

第三章 総合巻の本文世界素描——朱雀院の造型と絵——

一 はじめに……………	124
二 第二類（≠旧河内本系）における「絵」……………	125

三	朱雀院に寄り添う第二類（北河内本系）	129
四	桐壺院の絵の行方	131
五	おわりに	135
第四章 絵合巻の物語総合と源氏の造型——諸本文の差異から——		
一	はじめに	137
二	物語総合の勝負	138
三	源氏に寄り添う第一類（北田青表紙本系）	142
四	おわりに	147
第五章 本文の差異から読み解く源典侍		
一	はじめに	148
二	本文の差異	149
三	おわりに	159
結節		
		162

第三部 『源氏物語』の享受

第一章 『光源氏物語抄』から『河海抄』へ——注の継承と流通——		
一	はじめに	167
二	『光源氏物語抄』から『河海抄』へ	168

三	『河海抄』の引用方法	174
四	『河海抄』の『光源氏物語抄』引用	176
五	『光源氏物語抄』の流通経路	179
六	おわりに	183
第二章 今川了俊筆『源氏物語』について——注記の性格と古筆家の改装——		
一	はじめに	187
二	空蟬巻について	188
三	奥書の模写と古筆家	191
四	朱と墨の判別	193
五	了俊注の特徴	196
六	先行注からの影響	200
七	傍注注記者	208
八	おわりに	210
第三章 近世前期の写本製作——伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から——		
一	はじめに	214
二	当該『源氏物語』の製作年次	215
三	表紙裏反故の性質	215
四	反故を出した書肆について	219
五	表紙屋弥兵衛の製作する本	221

六 紙の種類と値段	227
七 作業の種類と値段	228
八 書写者について	231
九 おわりに	234

資料編

一 専修大学図書館蔵今川了俊筆『源氏物語』空蟬卷	237
二 今川了俊筆『源氏物語』桐壺・夕顔卷伊予切集成	237
三 伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故——翻刻と紹介・文学資料篇——	272
四 伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故——翻刻と紹介・雑記篇——	299
初出一覧	341
あとがき	387
索引凡例	390
I. 書名・人名・年代索引	392
II. 『源氏物語』作中人物・卷名等索引	393
III. 事項索引	404
	407

序章

一 本文の流動性

文学作品の本文と言うものは、一般には、ある時期（成立時期）に、一人の作者によって作成された一つの本文として考えられていることが多いのではないだろうか。

しかし、近代以前の場合、作者は一人と定まっていけない。例えば、『うつほ物語』であれば、現在の諸本とほぼ同じ形の本文になるまでいくつもの段階を経ているようであるし、『伊勢物語』も同様の事情が考えられている。

本文も、基本的に固定されたものではなく、一つの文学作品には複数の本文がある。物語について言えば、よく知られているように『狭衣物語』、『住吉物語』などは、さまざまに語られた、さまざまな本文を有しているし、それ以外の物語も、孤本でない限り、複数の本文があり、それらの本文には、さまざまな差異がある。

このような問題を含んでいるにも関わらず、物語（文学作品）を現代の読者が読む場合、複数の本文を校訂することとで本文を固定化し、注釈によってさらに読みを限定された作品を、現代の読者が読む、という形で享受されることがほとんどではないだろうか。

二 物語の諸本

物語には、先述したごとく、孤本でない限り、複数の本文がある。一般に「諸本」と呼ばれているものがそれであるが、「諸本」と呼ぶときには、近代以降の活字本は含まれないことが多い¹。だが、同じ写本を底本に用いようとも、

- 定かではないものの、現在知られている限りでは、一つのグループを形成していることから、ひとまず、複数の定家作成『源氏物語』総体を示す名称として「定家本」を使用する。
- (11) 池田亀鑑『源氏物語大成』巻七 中央公論社 一九五六・二二
- (12) 久保田淳、山口明穂校注『六百番歌合』新日本古典文学大系38 岩波書店 一九九八・二二
- (13) 片桐洋一「もう一つの定家本『源氏物語』『源氏物語以前』笠間書院 二〇〇一・一〇、加藤洋介「青表紙本源氏物語の目移り」『国文学』平成十一年四月号 一九九九・四
- (14) 本書第一部第一章参照。
- (15) 米田明美「『風葉和歌集』桂切の新出『源氏物語』歌について―付『風葉和歌集』に用いられた『源氏物語』本文考察」『甲南国文』四七巻 二〇〇〇・三。なお、撰者為家説は再考すべきであるとの発表を田淵句美子が和歌文学会関西例会(二〇〇八・七・五)で行った。論の進展が待たれる。
- (16) 伊井春樹「源氏之雑説抄物(翻刻)」『源氏物語及び以後の物語 研究と資料―古代文学論叢第七輯』武蔵野書院 一九七九・十二。ただし、了俊の言う「青表紙」「河内本」は本文自体を指さないことも多い。本書第一部第二章参照。
- (17) 加藤洋介「了俊・兼良の源氏物語―書院部蔵源氏物語をめぐって―」(愛知県立大学 説林)四七 一九九九・三
- (18) 伊井春樹編『花鳥余情』桜楓社 一九七八・四
- (19) 久保木秀夫「冷泉為相本、嘉吉文安年間における出現―伝一条兼良筆桐壺巻断簡、及び正徹本の検討から―」日向一雅・仁平道明編『源氏物語の始発 桐壺論集』竹林舎 二〇〇六・十一
- (20) ただし、同じ三条西家の本であっても、本文は徐々に変化している。本書第一部第三章参照。
- (21) 清水婦久子著『源氏物語版本の研究』和泉書院 二〇〇三・三
- (22) 「源氏物語玉の小櫛」『批評集成源氏物語』第二巻 ゆまに書房 一九九九・五
- (23) なお、大島本に関しては佐々木孝浩「大島本源氏物語の書誌学的考察」(斯道文庫論集41 二〇〇七・二)という特記すべき論が現れた。この論を『源氏物語』研究者が今後どのように消化していくか、興味深いところである。
- (24) 本書校正中にも、大沢本、飯島本などの「発見」が伝えられている。

第一部 『源氏物語』本文系統の再構築

第一章 揺らぐ「青表紙本／青表紙本系」

一 はじめに

一九八〇年代に相前後して発表された阿部秋生・片桐洋一¹⁾の論以降、「青表紙本系」という括りや、「青表紙本」という名称自体に疑問を持つ研究者が増えており、特に近年、『源氏物語』本文に関する論考が多産されている。だが、定説は未だなく、何がどう問題なのかについての論点も論者によって微妙に異なっており、論の多産が、錯綜した状況に拍車を掛けているくらいさえある。

一方、『源氏物語』諸本の再整理は遅々として進まない。本来ならば、「青表紙本系」「河内本系」という名称の使用を止め、通常の文献学的処理(本文の特徴)によって、巻ごとに『源氏物語』諸本の見取り図を再構築すべきであるにもかかわらず、である。

このような状況を、室伏信助は端的に「源氏物語の本文研究は、いま二つの大きな危機に直面している。その一は、近年の本文研究の進展に伴い、これまで殆ど絶対視されてきた青表紙本の概念規定が大きく揺れ始めたことに対する